



TITLE:

根治的膀胱全摘出後に単独皮下転移をきたした膀胱移行上皮癌の1例

AUTHOR(S):

七浦, 広志; 山田, 芳彰; 深津, 英捷

CITATION:

七浦, 広志 ...[et al]. 根治的膀胱全摘出後に単独皮下転移をきたした膀胱移行上皮癌の1例. 泌尿器科紀要 2002, 48(3): 179-181

ISSUE DATE:

2002-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/114709>

RIGHT:

根治的膀胱全摘出後に単独皮下転移をきたした 膀胱移行上皮癌の1例

愛知医科大学医学部泌尿器科学教室 (主任: 深津英捷教授)

七浦 広志*, 山田 芳彰, 深津 英捷

A CASE OF SUBCUTANEOUS METASTASES FROM BLADDER CANCER AFTER RADICAL CYSTOURETHRECTOMY

Hiroshi NANAURA, Yoshiaki YAMADA and Hidetoshi FUKATSU

From the Department of Urology, Aichi Medical University School of Medicine

A case of transitional cell carcinoma (TCC) of the bladder metastasizing subcutaneously to the right lower abdomen and to the left back approximately 2 years after radical cystourethrectomy is reported. A 65-year-old male underwent radical cystourethrectomy with the creation of ileal conduit after preoperative intraarterial chemotherapy and radiotherapy. At the out patient clinic two years postoperatively, a subcutaneous tumor was palpated in the right lower abdomen and the left back. The tumors were removed and histopathologically diagnosed as subcutaneous metastases of TCC. The patient received three courses of postoperative systemic chemotherapy. At 15 months after the last chemotherapy, the patient remains free of metastases and relapse.

(Acta Urol. Jpn. 48 : 179-181, 2002)

Key words : Subcutaneous, Bladder cancer, Radical cystourethrectomy

緒 言

膀胱移行上皮癌の転移はリンパ節, 肺, 肝臓, 骨に多く¹⁾, 皮膚および皮下転移に関する報告は稀である。今回われわれは, 膀胱全摘除術を施行後, 約2年を経過した右下腹部および左背部皮下に転移をきたした膀胱移行上皮癌の1例を経験したので報告する。

症 例

患者 : 65歳, 男性

主訴 : 右下腹部腫瘍

既往歴 家族歴 : 特記事項なし

現病歴 : 1998年2月8日, 肉眼的血尿にて来院。膀胱癌 stage T4N0M0 の診断のもと, 術前補助療法として動注化学放射線併用療法施行 (CDDP 100 mg, THP-ADM 30 mg, radiation 20 G, 腫瘍縮小率 56%), 5月19日, 膀胱尿道全摘除術, 回腸導管造設術を行った。

摘出標本には前立腺部尿道に乳頭状および非乳頭状の移行上皮癌を認め, 摘出標本には前立腺部尿道に乳頭状および非乳頭状移行上皮癌を認め, 病理診断は TCC, G2>G3, INFβ, pT4, pN0, pV0, pL0 であった。術後に補助化学療法は施行せず, 外来通院中であつたが, 2000年2月9日, 右下腹部に腫瘍を触知

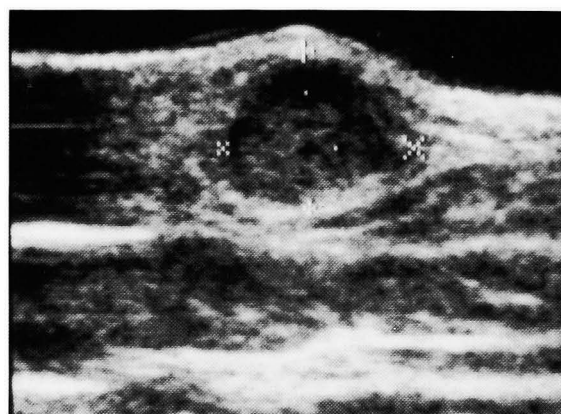


Fig. 1. Echo gram : a tumor was detected in the right lower abdomen (17×14 mm).

したため精査, 治療の目的にて入院となった。

入院時現症 : 体格中等, 栄養良好, 右下腹部に 20×20 mm 大, 弾性硬で表面平滑な可動性のある腫瘍を触知するも表在リンパ節は触知しなかった。

血液生化学検査 : 特記事項なし

排泄性尿路造影検査 : 特記事項なし

超音波検査 : 右下腹部皮下に 17×14 mm の内部は比較的均一な腫瘍を認めた (Fig. 1)。

胸部 CT 検査 : 左背部皮下に造影効果のある 21×14 mm の内部, 比較的均一な腫瘍を認めた (Fig. 2)。

入院後経過 : 膀胱移行上皮癌の皮下転移を疑い2000年2月15日, 局所麻酔下に右下腹部および左背部腫瘍

* 現 : 国保坂下病院泌尿器科

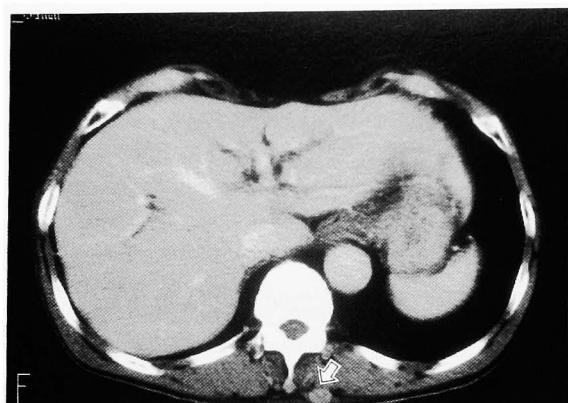


Fig. 2. Chest CT scan: a tumor was demonstrated in the left back (arrow).

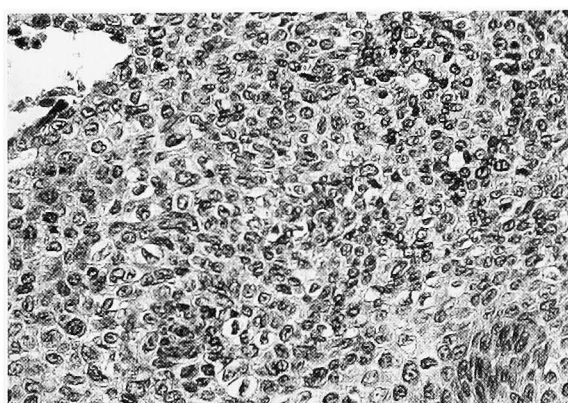


Fig. 3a. Histopathology: original tumor from TCC G2>G3.

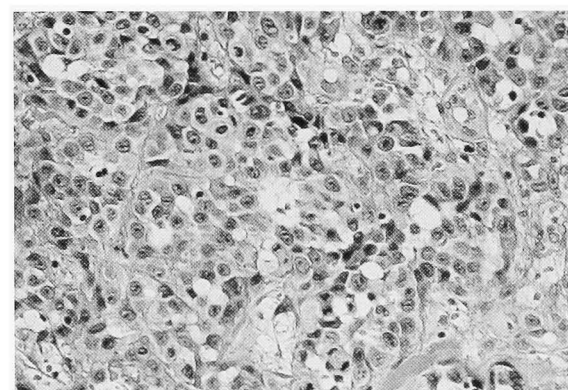


Fig. 3b. Histopathology: subcutaneous Metastases from TCC.

摘除術を施行した。肉眼所見で腫瘍は、20×15 mm, 8 g, 赤色、弾性硬であった。病理組織検査：下腹部、背部ともに TCC であり膀胱移行上皮癌の皮下転移と診断した (Fig. 3a, b)。4月9日より M-VAC (MTX 30 mg/m², VLB 3 mg/m², ADM 30 mg/m², CDDP 70 mg/m²) による全身化学療法を3クール施行後15カ月経過した現在、転移および再発なく経過良好である。

考 察

膀胱移行上皮癌の皮膚および皮下転移は1948年に Higgins ら²⁾ による報告が最初である。膀胱移行上皮癌の転移部位は Kishi ら¹⁾ によるとリンパ節、肺、肝臓、骨の順に多く、その頻度はそれぞれ37.9, 29.9, 29.9, 24.1%であり、皮膚転移の頻度は2%ときわめて低い。

本邦において皮膚および皮下転移は朴ら³⁾ の報告では剖検例において1,275例中72例で5.7%, 藤田ら⁴⁾ は1981年から1990年の10年間における4,200例の剖検例の検討で4.2%であったと報告している。また高安ら⁵⁾ は54例中1例で1.6%にすぎないとしている。また欧米においても Lookingbill ら⁶⁾ は1976年から1985年の10年間で314例中7例、2.2%であったと報告している。転移性皮膚腫瘍の臨床所見は Brownstein ら⁷⁾ によって、結節型、炎症型、硬化型の3型に分類され、結節型は集合した硬い無痛性結節を特徴とし最も多く認められ、炎症型は紅斑と浮腫など急性炎症像を示す。硬化型は瘢痕様で繊維性の間質のなかに腫瘍細胞が索状に配列しているとされ自験例は結節型の皮下転移と考えられる。皮膚への到達経路として Willis ら⁸⁾ は直接浸潤、リンパ行性、血行性をあげている。

西村ら⁹⁾ は転移経路の鑑別方法として血行性転移では、多発性、同時性で相互に連続性がみられず、肺血管内に癌細胞があれば確実とし、リンパ行性転移では表皮下リンパ管内に腫瘍細胞が充満することによるリンパ浮腫を特徴とし、皮膚病変と原発巣の間に連続性のあるリンパ節転移が存在するとしている。自験例における皮膚への転移経路については同時性、多発性で相互に連続性がないことより血行性転移と考える。本邦での膀胱移行上皮癌の皮膚および皮下転移の報告例はわれわれが検索し得たかぎり15例であり (Table 1), 再発までの期間については12例に記載があり1月から5年 (平均14.7カ月) であった。転移経路についてはリンパ行性転移が4例、血行性転移が3例報告されている。予後は記載のある7例について、1から7カ月 (平均4.0カ月) であった。

転移経路の違いによる予後には差がなく、予後不良の原因としては膀胱移行上皮癌からの皮膚および皮下転移は他の転移性皮膚癌の場合と同様にその進展の末期に発生するものと考えられているためである。しかし本症例は末期に発生したものではなく、他の部位への転移は認められず、本邦での膀胱移行上皮癌の単独の皮下転移で長期生存例の報告としては、第1例目と考える。治療法としては、化学療法、放射線療法および両者の併用療法が施行されているが確立された治療法はなく、本症例では根治的膀胱全摘出術前の補助療法として施行した動注化学放射線併用療法にて腫瘍縮

Table 1. Case reports of TCC of the bladder metastazizing subcutaneously

No.	報告年度	報告者	年齢	性別	初回治療	転移までの期間	皮膚以外の転移部位	サイズ	転移後の治療	転移後の転帰
1	1983	森田ら	68	男	膀胱全摘	23カ月	—	不明	放射線	1 カ月
2	1984	箸方ら	81	女	ADM+皮膚瘻	6 カ月	なし	不明	ADM	3 カ月
3	1984	Takematu ら	60	女	記載なし	不明	—	不明	—	4 カ月
4	1985	山内ら	62	女	膀胱全摘	11カ月	—	不明	Tegafurt	不明
5	1985	山内ら	77	男	TUR+ADM	43カ月	—	不明	—	不明
6	1986	堀口ら	75	女	部分切除	41カ月	—	不明	—	不明
7	1986	宜野座ら	39	男	部分切除	9 カ月	—	不明	—	3 カ月
8	1987	藤田ら	77	男	TUR	3 カ月	—	不明	—	不明
9	1987	藤田ら	72	男	膀胱全摘+CAP	6 カ月	—	不明	—	不明
10	1988	田中ら	58	女	膀胱全摘	22カ月	脳	不明	CAP	7 カ月
11	1989	滝川ら	77	男	放射線+ADM	7 カ月	—	20 mm	ADM	2 カ月
12	1989	滝川ら	85	男	TUR+放射線, 膀胱全摘	60カ月	鼠経リンパ節	不明	—	不明
13	1991	高橋ら	72	女	ADM+放射線	不明	S状結腸	10 mm	—	7 カ月
14	1995	石田ら	81	女	TUR	1 カ月	なし	不明	—	5 カ月
15	1996	井崎ら	42	男	TUR+ADM	不明	肺, 骨	不明	CAP	不明
16	2001	自験例	65	男	膀胱尿道全摘	24カ月	なし	17×14 20×15 mm	M-VAC	生存

—: 記載なし.

率56%であったことを考慮し, M-VAC による全身化学療法を3クール施行した.

15カ月経過した現在, 他の部位への転移, 再発なく経過良好である. しかし血行性転移が示唆されるため今後も厳重な経過観察が必要であると思われる.

結 語

本邦第16例目の膀胱移行上皮癌の皮下転移の1例を報告した.

本症例は血行性転移が示唆された. 膀胱移行上皮癌の末期癌ではない単独の皮下転移の報告としては本邦第1例目である. M-VAC による全身化学療法を3クール施行後15カ月経過した現在, 再発なく経過良好である.

本論文の要旨は第208回日本泌尿器科学会東海地方会(2000年5月13日, 名古屋)で発表した.

文 献

- 1) Kishi K, Hirota T and Matsumoto K: Carcinoma of the bladder: a clinical and pathological analysis of 87 autopsy cases. *J Urol* **25**: 36-39, 1981
- 2) Higgins EC and Hansfield KF: Cutaneous metastases from carcinoma of the urinary bladder.

J Urol **59**: 879, 1948

- 3) 朴 勺, 金 哲将, 石田 章, ほか: 膀胱腫瘍の転移に関する統計的観察. *泌尿紀要* **33**: 1835-1839, 1987
- 4) Fujita K, Sakamoto Y, Fujime M, et al.: Two cases of inflammatory skin metastasis from transitional cell carcinoma of the urinary bladder. *Urol Int* **53**: 114-116, 1994
- 5) 高安久雄, 阿曾佳郎, 星野嘉伸, ほか: 泌尿器悪性腫瘍の転移について. *日泌尿会誌* **61**: 1097-1101, 1970
- 6) Lookingbill DP, Spangler N and Sexton FM: Skin involvement as the presenting sign of internal carcinoma. *J Am Acad Dermatol* **22**: 19-26, 1990
- 7) Brownstein MH and Helwig EB: Spread of tumors to the skin. *Arch Dermatol* **107**: 80-86, 1973
- 8) Willis RA: Secondary tumors of the skin and subcutaneous tissues. In: the spread of tumors in the human body. ed by Willis RA, pp 276-281, Butterworth, London, 1952
- 9) 西村長応, 橋爪健二, 安井昌孝, ほか: 転移性皮膚悪性腫瘍について, 本邦に於ける最近10年間: (昭和21年から30年迄)の統計的観察. *日皮会誌* **67**: 319-334, 1957

(Received on August 17, 2001)

(Accepted on November 16, 2001)